

2020 年度（令和 2 年度）

事 業 報 告 書

－ 2021 年 6 月 17 日 －

公益財団法人国際高等研究所

事業報告書

— 目 次 —

I. 政府による緊急事態宣言を踏まえた法人運営及び事業活動の自粛	1
II. 研究事業活動	2
『1』 月次会議	2
『2』 中核を成す「自主研究」	2
『3』 共同研究・受託研究による公益目的の達成	5
『4』 学術交流事業及び地域交流事業	7
『5』 研究活動に係る成果の発信強化・広報活動の充実	11
III. 法人運営	13
『1』 評議員会、理事会の開催状況	13
『2』 賛助会員制度の導入に向けた取り組み	13
『3』 大型施設・設備改修工事の実施状況	14
『4』 資産運用状況	14
IV. 2020 年度（令和 2 年度）財務・収支実績	15
『1』 経常収益の概要	15
『2』 経常費用の概要	15
『3』 最終収支	16
『4』 基金の取扱いについて	16
『5』 今後の見通し	16
参考資料	17

公益財団法人国際高等研究所 2020 年度（令和 2 年度）事業報告

国際高等研究所における 2020 年度の事業活動については、事業計画の着実な実行を以て目に見える成果に繋げていき、持続的な法人運営のための基盤構築を進める 1 年とするとの活動方針に基づき、特に中心を成す研究事業が 3 年目の区切りを迎えることから、これまでの 3 年間の活動を振り返りながら総括する事業展開を図った。

さらに、けいはんな学研都市全体としての視点を尊重しつつ、（公社）2025 年日本国際博覧会協会との関係性を構築し、高等研としての学術研究機能を最大限に発揮して同協会の活動に貢献できるよう努める計画でもあった。

しかしながら、2020 年度における我が国を襲った新型コロナウイルス感染症の全国的な拡大が、政府による大都市圏を中心とする緊急事態宣言の 2 度の発出をもたらし、社会・経済活動の自粛に繋がった。2020 年度は、このような危機的な社会状況を踏まえ、高等研においても研究事業及び交流事業、さらには外部機関との連携協力等の活動の自粛を余儀なくされたが、持続可能社会の実現に向けた大きな社会課題が顕在化した年であったとも言える。

I. 政府による緊急事態宣言を踏まえた法人運営及び事業活動の自粛

2020 年 2 月以降において、中国武漢市から全世界に拡散した新型コロナウイルス感染症は、我が国において大きな影を落とし、高等研においても事業活動を自粛せざるを得ない状況に至った。

このような状況下、政府は、2020 年 4 月 7 日に大阪府、兵庫県を含む 7 対象都道府県を指定して、5 月 6 日までの当面の期間を設定した緊急事態宣言を発出した。政府の緊急事態宣言を受け、高等研においては、急な状況の悪化で高等研を閉鎖する必要が出た場合をも想定した「新型コロナウイルス感染症拡大対応策（基本方針）」を取りまとめ、最悪の事態に備えることとした。

その一方、両府県在住者が勤務すること、大阪府に隣接する準指定地域に該当すること等に鑑み、政府および京都府の要請を踏まえ、4 月 13 日から当面の期間、職員の感染予防、感染拡大防止及び当該宣言解除後、速やかに定常業務に戻せるよう円滑な業務の継続を目的として、在宅勤務を踏まえた職員約 70%の出勤者削減を図ることとし、その運用に入った。

2020 年 4 月 16 日には緊急事態宣言対象域が全都道府県に拡大され、先の 7 対象都道府県に京都府等を加えた 13 都道府県が、特に重点的に感染拡大防止の取り組みを進める必要があるとして、「特定警戒都道府県」に指定された。全国的に新型コロナ禍が猛威を増す中、2019 年度第 4 四半期以降に決断した事業活動の自粛を継続したところである。

一方、5 月 14 日以降、新型コロナウイルス感染症の鎮静化の動向に対応すべく、順次、特定警戒都道府県は縮小に向かった。5 月 21 日に、京都府が解除され、5 月 25 日には全都道府県の指定が解除されるに至った。

高等研においては、5 月 22 日を以て職員は通常勤務に復帰し、交流事業に係る新型コロナウイルス感染拡大防止ガイドラインを 6 月 22 日に制定し、新しい生活様式を実践するこ

とにより事業活動を再開した。

2021 年の年明けを迎え、新型コロナ禍パンデミックは全国的に第 3 波の拡大を見せ、特に感染拡大の影響が大きい首都圏 1 都 3 県に対して緊急事態宣言が 2021 年 1 月 8 日に発出されたのを受け、近畿圏においても 1 月 13 日に 2 府 1 県（大阪・京都・兵庫）に対して同宣言が出された。

高等研では 1 月 14 日から再度、緊急事態宣言下の業務体制（3 交替勤務と在宅勤務の併用）に移行し、当該宣言が効力を持つ期間（宣言延長で 3 月 7 日まで）の公開事業は中止または延期を決定した。

2020 年度は、高等研においても 1 年間を通じて新型コロナ禍パンデミックの影響から逃れられない年となった。

II. 研究事業活動

『1』月次会議

高等研の研究事業を中心とする事業活動の進め方、個別事業の進捗状況の把握及び個別事業間の調整を協議・検討するため、所長、副所長及び事務スタッフによる月次会議を、原則毎月 1 回開催した。

上半期においては、4 月度開催の準備をしたところ、新型コロナウイルス感染症予防の観点から開催を中止したが、その動向を注視して、8 月度から再開した。

第 1 回月次会議： 4 月 26 日（日）京都府緊急事態宣言発出に伴い中止

第 1 回月次会議： 8 月 4 日（火）

3 密回避するとともに一部遠方出席者についてはリモート参加として再開

第 2 回月次会議： 9 月 20 日（日）

第 3 回月次会議： 10 月 18 日（日）

第 4 回月次会議： 11 月 15 日（日）

第 5 回月次会議： 12 月 20 日（日）

第 6 回月次会議： 2021 年 1 月 15 日（金）：京都府緊急事態宣言発出に伴い中止

第 7 回月次会議： 2021 年 2 月 19 日（金）：京都府緊急事態宣言発出に伴い中止

第 8 回月次会議： 2021 年 3 月 21 日（日）

『2』中核を成す「自主研究」

1. 総括

現在、人類は持続的生存が脅かされる課題に直面し、生き方や価値観の転換までも問われている。こうした時代的、社会的背景に由来する地球規模の課題にどう対処していくのか。人類の未来と幸福に向けた学問、科学技術はどのようなものなのか。こうした課題に対峙し、人間を強く意識し人々の生活と密接に関わりながら、これからの学術研究や社会に適する方向と概念の創出に向けた活動を行うため、2018 年度より下記の 3 基幹プログラムを実施した。

2020 年度末にこれら 3 課題が区切りを迎えることから、2020 年度は、これまでの 2 年間の活動の充足し、3 年間の研究活動の総括、取りまとめを行った。研究事業の推進に際

し、研究企画推進会議から有益な助言を得た。また、文部科学省科学研究費補助金「特定奨励費」への申請を行った。尚、コロナ禍を鑑み、2020年度の会合はオンラインと対面の併用にて実施した。

2. 基幹プログラムの実施と取りまとめ

以下の3プログラムを実施、報告書を発行、公開した。ただし、(3) ②については、2021年度に中間報告書を発行、公開予定である。(詳細は、別添「付属明細書1」参照)

(1) SDGs 時代における科学技術のあり方～ブダペスト宣言から20年～

代表者：有本建男 国際高等研究所チーフリサーチフェロー (2020年度副所長)

政策研究大学院大学客員教授

科学技術振興機構研究開発戦略センター上席フェロー

内 容： SDGs 時代の科学技術の主題とその方法や仕組み、並びにコロナパンデミックに遭遇した現実を前に科学技術と科学者技術者のあり方について、根本から問い直した。

報告書：「SDGs とコロナパンデミックの時代における科学技術のあり方を考える」

(2020年10月発行)

"Considering Science and Technology in the Age of SDGs and COVID-19 Pandemic", March 2021

(2) 第4次産業革命への適応～社会経済システムの再編成～

代表者：佐和隆光 国際高等研究所チーフリサーチフェロー (2020年度副所長)

内 容：人工知能をはじめとする ICT 機器の進化と普及が及ぼす社会経済的影響を明示化し、ポジティブな影響を活かし、ネガティブな影響を防ぐための方策について探究した。

報告書：「第4次産業革命への適応～社会経済システムの再編成～」(2020年9月発行)

"Adaptation to the Fourth Industrial Revolution – Reorganization of the Socioeconomic System –", March 2021

(3) 教育を基軸とした住民参加型地域振興

代表者：高見茂 国際高等研究所チーフリサーチフェロー (2020年度副所長)

京都光華女子大学学長

京都大学学際融合教育研究推進センター特任教授

1) けいはんな学研都市地域を軸とした教育システム輸出拠点の形成

内 容：諸外国の教育制度やオフショア・オンショアスクールの世界的動向を踏まえ、教育システム輸出入拠点の形成に向けた課題や視点を考えると共に、国際教育都市としての「けいはんな」の可能性を考察した。

報告書：「教育システム輸出入拠点の形成～国際教育都市「けいはんな」の可能性を探る～」

(2020年9月発行)

"Creating a Hub for Import / Export of the Educational System – Exploring the Possibility of Keihanna, an International Educational City –", March 2021



基幹プログラム3 テーマの和英版報告書

2) けいはんな学研都市地域の振興に向けた具体的試み～ヘルスリテラシー向上を通して～

内 容：ヘルスリテラシーの内容とその向上に取り組む活動を、学術、社会、地域の側面から調査し、ヘルスリテラシーに係る課題やけいはんな学研都市地域の振興に向けた今後の具体的展開について検討した。

報告書：2021 年度に中間報告を発行予定である。

3. 研究企画推進会議の開催

2020 年 12 月 10 日に研究企画推進会議を開催し、研究成果の取りまとめや発信、次年度以降の研究活動の方向性、高等研のあり方や役割などについて意見交換を行った。本会議の俯瞰的、長期的視野からの助言は、研究活動の推進や高等研の将来構想を進める上での指針となった。（詳細は、別添「付属明細書 1」参照）

4. 寄付金を原資とする活動計画の立案と当該事業の立ち上げ

2020 年 1 月に故人の遺産による大口の個人寄付金を受け入れた。

医学関係の研究活動に活かして貰いたいという故人のご遺志を尊重しつつ、今後 10 年程度の研究期間を想定した高等研としての取り組み課題に相応しい新たな活動計画を慎重に検討し、企画・準備を進めることとして取り組んだ。

2020 年度において当該事業の早期の立ち上げを図るべく、新たな活動計画の検討を進めた。

5. 文部科学省科学研究費補助金「特定奨励費」

当該補助金制度の動向把握に努め、2020年度の申請の要否について検討した結果、2021年度から23年度の採択に向け申請することとした。2020年11月に研究事業名を「ポスト・コロナ禍における持続可能社会を実現する方途を探る統合研究」として書類申請を行い、2021年1月27日にヒアリング審査を受けた（2021年4月1日付審査結果は不採択）。

『3』 共同研究・受託研究による公益目的の達成

国際高等研究所がこれまで実施してきた研究活動の成果の蓄積や、大学や研究機関及び研究者と構築してきたネットワークなど、学術研究機関として有している高度な知的情報を活かし、社会からの要請に応える観点から、行政や産業界（企業）との間で、公益性を担保する共同研究や受託研究を受けることは、高等研の社会との関係性を強化する一助となり得るものである。

2020年度においては、下記3件（行政と1件および産業界と2件）について実施した。

1. 京都府 けいはんな学研都市・文化力強化推進事業（2018年度からの継続事業）

テーマ：「日本文化創出を考える」

1) 目的

高等研が「オールけいはんな」「オール京都」の中核としての役割を果たすべく、けいはんな地域と密接に関わる日本文化と産業応用のあり様について研究会を通して議論し、その成果を京都府や立地機関をはじめ産・学・公・民に対して提言する。また、当該事業の成果を活用する場として、2025年大阪・関西万博の企画にも繋げられるように努めるものである。

2) 活動状況

第1回（通算16回）研究会：7月17日（金）於京都高度技術研究所（ASTEM）

第2回（通算17回）研究会：9月4日（金）於京都高度技術研究所（ASTEM）

第3回（通算18回）研究会：10月28日（水）於けいはんなプラザ

京都スマートシティエキスポ2020の一環として公開討論を実施。

第4回（通算19回）研究会：12月15日（火）於京都高度技術研究所（ASTEM）

第5回（通算20回）研究会：2021年2月19日（金）～3月5日（金）

新型コロナウイルス感染症予防の観点から、メール交信による議論を行った。

2020年度は、コロナ禍における日本文化のあり方について宗教、音楽、コミュニティ等の観点から考察して、その中から新しい文化が芽生える契機を捉え、ニューノーマルの時代における文化の必要性について上記した研究会を通して議論し、その成果を取りまとめた報告書を作成し、京都府に提出した。

2. タツタ電線株式会社からの受託調査研究（2019年度から継続）

テーマ：「5G社会における電磁波の利活用に関する調査研究」

1) 目的

来るべき5G社会のあり様について様々な角度から検討し、健康・身体との関係や効能、文化との関り、災害対策や農業における利活用等、電磁波の可能性、社会

に与える影響などを相対的に把握し、「電磁波と共存する社会像」を能動的に訴求する。

2) 活動状況

2020 年度上半期よりヒアリング調査を実施予定であったが、新型コロナウイルス感染症予防の観点から緊急事態宣言が解除されるまで活動を自粛した。7 月より下記 5 件のヒアリングを実施したが、コロナ禍の影響が続くと予想されたため、関西圏以外のヒアリングについては、ヒアリングの方法と候補者を見直した。さらに、2021 年 1 月 14 日に再度緊急事態宣言が発出されたため、2020 年度内には関西圏以外へのヒアリングが進められなくなったことから、タツタ電線（株）と協議して契約期間を 2021 年 9 月までに延長することとなった。

【ヒアリングを実施した研究機関】

①通信手段としての電磁波の利活用について

2020 年 7 月 20 日（月）

同志社大学理工学部電子工学科通信方式研究室 岩井誠人教授

2020 年 8 月 27 日（木）

京都大学大学院情報学研究科 原田博司教授

②エネルギーの伝送手段としての電磁波の利活用について

2020 年 10 月 22 日（木）

京都大学生存圏研究所生存圏電波応用分野 篠原真毅教授

③電磁波の生命に対する影響について

2020 年 10 月 22 日（木）

京都大学生存圏研究所生存圏電波応用分野 宮越順二特任教授

④電磁波の特性による利活用について

2020 年 11 月 25 日（水）

三重大学大学院生物資源学研究科 橋本篤教授

3. 京セラみなとみらい研究所からの受託研究（2020 年度新規）

テーマ：「あるべき社会の姿や未来予測に関する調査研究」

1) 目 的

あるべき社会の姿や未来予想に関する、高等研戦略会議（ISC）での議論に代表される研究成果を 3 回の会合で京セラ殿に紹介する。京セラ（株）は、その知見をベースに、グローバルな社会課題への長期的な研究テーマ、これからの研究開発の方向性を社内関係者で議論される。

2) 活動状況：

第 1 回会合：8 月 3 日（月） オンライン開催

第 2 回会合：9 月 11 日（金） オンライン開催

第 3 回会合：10 月 21 日（水） オンライン開催

『4』学術交流事業及び地域交流事業

1. 『集合知ネットワーク』（きづ会議）構築プロジェクト」（2019 年度新開始）

（詳細は、別添「付属明細書 2」参照）

代表者：駒井 章治 国際高等研究所客員研究員

東京国際工科専門職大学工科学部情報工学科教授

1) 目 的

新型コロナウイルス感染症や降雨災害、震災など、世界各国において予想もしない災害が猛威を振るっている現在、IT 技術の発達に伴い、社会の多様化が極度に進み、社会の在り方の変化のスピードもヒトの脳力を超えたものとなっている。こういった現状を踏まえ、質の高い情報をスピード感を持って活用していくために、常に様々な事象に対して積極的態で議論し、思考しておくことにより「構え」をとっておくことが有用である。

2) 活動状況

本企画では、様々な分野や経験の違いを越えて「知識の交流」を行い、その醸成から新たな「智の創発」を生み出し得る「智の原始スープ」を構築し、集う者全てが平易で議論し、知識を交流させ、アップグレードさせるとともに、「人として交流できる場」を提供するもので、2019 年度から新たな事業として取り組んでいる。

2020 年度には、各方面の研究者を対面やオンラインで招集して 12 回の研究会を開催して、今後必要と考えられるテーマについて議論を深めた。

2. 「エジソンの会」

（詳細は、別添「付属明細書 2」参照）

1) 経緯と目的

エジソンの会は、けいはんな学研都市が標榜する「立地機関間の連携とそれによる成果の創出」を促進するために、高等研が知的ハブとしての役割を果たし、立地機関の研究者や技術者のコミュニティを形成し、具体的な「オープンイノベーション」の成功事例の確立に寄与することを目的として発足したものである。2016 年に発足以来、初期は AI に関して様々な角度から考察し、2019 年度からは未来社会の在り方を想定した上で我々の生活や社会に大きな影響をもたらすと思われる分野・技術に焦点を当て、未来に向けて取り組むべき研究対象や技術開発対象は何かを考察している。2019 年度末までに 34 回開催しており、会合を通して、けいはんな学研都市に集結している企業及び研究機関の研究者や技術者が知識を共有し、積極的に対話できる場を提供することで、けいはんな地区における「知的ハブ」機能を果たしているものとする。

2) 活動状況

2020 年度は、前年度に引き続き、「未来に向けて取り組むべき研究開発」を年間テーマとして、付属明細書 2 に示す内容でオープン・セミナーを開催した。計画では年間に 5 回の会合を開催する予定で企画を行ったが、新型コロナウイルス感染症予防の観点から活動を自粛し、予定していた 5 回中の 3 回を延期した。交流事業に関する感染防止ガイドラインを策定し、そのガイドラインを順守しつつ 8 月に再開

して第 35 回会合を開催した。その後、11 月にも 36 回会合開催したが、2021 年 1 月 14 日に 2 度目の緊急事態宣言が発出されたため、年度内の予定はすべて 2021 年度に延期した。

3. 哲学カフェ「ゲーテの会」

(詳細は、別添「付属明細書 2」参照)

1) 経緯と目的

満月の夜に開く けいはんな哲学カフェ「ゲーテの会」は、高等研が関西文化学術研究都市の中核機関として、相互の連携や知的活動、さらには参加者相互の人脈構築や交流の中心的役割を担うという「知的ハブ」機能を果たすことを目的としている。

2 年間を一つのステージをして捉えて企画しており、第 1 ステージは「経済至上主義、科学技術至上主義からの脱却を求めて」、続く第 2 ステージは「日本の未来を拓くよすが(拠)を求めて」、そして第 3 ステージは「未来に向かう人類の英知を探る」であった。2019 年度からの第 4 ステージでは、『次代を見据え、東西の架け橋たらんとした先覚者』の思想と行動を尋ねる、あるいは『日本と世界の歴史の転換点で転轍機を動かした先覚者』の事跡を辿り、『新しい文明』の萌芽を探る。」と題した新規展開を図っている。

2) 活動状況

2020 年度は前年度同様に、上半期 5 回、下半期 5 回の年間 10 回の開催を計画していたが、緊急事態宣言が発令された 4 月から 6 月、2021 年の 1 月と 2 月に予定していた講演については、新型コロナウイルス感染症予防の観点から開催を自粛して来期に延期した。2020 年 6 月 22 日に高等研の交流事業に関する感染防止ガイドラインを策定し、2020 年 7 月の第 80 回会合からガイドラインを順守しつつ、定員を半分に減らして再開し、本年度は下記のとおり定例会を 5 回開催した。

第 80 回：7 月 21 日(火)

テーマ：「三島由紀夫」空っぽになってしまった日本を衝く

講師：高橋 義人 京都大学名誉教授、平安女学院大学特任教授

第 81 回：8 月 24 日(月)

テーマ：「無意識の哲学」により文化と思想に大きな影響を与えた人物

『フロイト』－精神分析入門－

講師：北山 修 九州大学名誉教授、精神科医

第 82 回：10 月 2 日(金)

テーマ：「応用をやるなら基礎をやれ」化学者たちの京都学派

－福井謙一をはじめとする喜多源逸の後継者たち－

講師：古川 安 総合研究大学院大学客員研究員、東京大学非常勤講師

第 83 回：11 月 5 日(木)

テーマ：「should の世界と how to の世界を問う。

統治理論の探求者『ニッコロ・マキアヴェッリ』

講師：澤井 繁男 元関西大学文学部教授、作家

第 84 回：12 月 1 日(火)

テーマ：「仏教の核心に「霊性の自覚」を出した鈴木大拙の思索。その世界性。

講師：佐々木 閑 花園大学文学部教授

3) ゲーテの会講師へのショートインタビュー動画配信

2020 年度の第 80 回ゲーテの会より、ゲーテの会の講師への 5～10 分程度のインタビューを実施して動画を録画し、YouTube の高等研チャンネルに公開する「ショートインタビュー動画配信」を開始した。2020 年度は上記した講師 5 名のショートインタビュー動画を公開しており、2021 年 4 月末時点で総計 6000 回以上のアクセスがあり好評を得ている。2021 年度以降の高等研からの情報発信の一つの事業コンテンツとして定着を図るべく、実施体制の検討を行う。

4. 特別企画：市民共同参画シンポジウム「IIAS 哲学と先端科学の対話シリーズ」

1) 経緯と目的

「ゲーテの会」と「エジソンの会」のこれまでの開催実績を踏まえ、2019 年度に人文社会系と科学技術系の知の融合を目指す市民共同参画シンポジウムを企画し開催している。異なる分野の先生方による対談・鼎談を通して議論すべきテーマを提起していただき、参加者が先生方と共に議論を行う。

2) 活動状況

2020 年度は、高等研が 6 月 22 日に策定した「交流事業に関する感染防止ガイドライン」を順守しつつ、第 2 回の市民共同参画シンポジウムを 9 月 18 日に開催した。第 1 回会合では、講演者と参加者とのコミュニケーションに重きを置いて、参加者の意見が反映できる World Café 形式を採用したが、第 2 回会合ではコロナ禍の影響により大幅な内容変更を余儀なくされた。募集人数を制限して講演会方式で開催し、3 密を避けるためにグループ討議を割愛したため、会合の狙いである「参加者が議論に参加する市民共同参画」の目的が十分に果たせなかった。第 2 回の結果を考慮して、2021 年度の開催を予定している第 3 回会合以降については、コロナ禍の影響を考慮しながらも、本来の目的に沿った運営に戻して進める予定である。

第 2 回：9 月 18 日（金）

テーマ：「情報科学／技術を哲学する」

講師：大澤 真幸 元京都大学教授

講師：前田 英作 東京電機大学システムデザイン工学部教授

5. 『独立自尊の志』養成プログラム「IIAS 塾ジュニアセミナー」

（詳細は、別添「付属明細書 2」参照）

1) 経緯と目的

『独立自尊の志』養成プログラム「IIAS 塾ジュニアセミナー」は、高校生のリベラルアーツ学修への興味と関心の涵養、自習する契機の提供を目的として、2016 年 3 月の初回開催から 2019 年度末までに 8 回の開催を重ね、受講生のみならず教育関係者から高い評価を得ている。また、2017 年より毎年 8 月に「けいはんな文化学術教育懇談会」を開催し、セミナーに参加いただいている高等学校の校長先生などに出席いただき、当該セミナーの充実と、より効果の高い事業展開を企画するための意見集約を図っている。

2) 活動状況

2020 年度夏季ジュニアセミナーは、2020 年 3 月開催を企画していた 2020 年春季ジュニアセミナーがコロナ禍の影響で延期したことを踏まえ、同じ内容に基づき、8 月 5 日（水）、6 日（木）、7 日（金）の 2 泊 3 日の日程で開催することとし、第 1 四半期においてその開催準備を進めた。しかし、新型コロナウイルス感染症拡散予防の観点から、2020 年度夏季ジュニアセミナーも中止せざるを得ず、計画した内容は次回以降に活用することとした。

2021 年 3 月開催の春季ジュニアセミナーは、オンライン方式による新たな実施方法を採用して実施した。当該セミナーは、新たな試みとして、募集対象地域を広げ、リモート（遠隔）による WEB 学習プログラムとしたものである。開催は 2021 年 3 月 24 日（水）～25 日（木）の 2 日間に短縮して実施した。受講生は受講経験者の大学生 6 名、高校生 28 名の合計 34 名であった。今回はオンラインでの実施ということから、東京の富士見丘高校から 2 名の受講応募があったこと、初めて大学生の参加が実現したことが大きな特徴である。受講内容は下記のとおり。

- ① 思想・文学分野 「松尾芭蕉」の世界を探求する
長谷川 権排人（朝日俳壇選者、神奈川近代文学館副館長）
- ② 政治・経済分野 民主主義の現代的意義を考える
足立 幸男 京都大学名誉教授
- ③ 科学・技術分野 原子力開発の過去・現在を考える
山崎 正勝東京工業大学名誉教授

3) ジュニアセミナーメインテキストの出版

本書籍は、「IIAS 塾ジュニアセミナー」（2016 年から 2018 年までの開催 6 回分）のメインテキストをベースに編集したもので、次の 3 巻から構成した。

- ① 佐伯啓思編著「高校生のための人物に学ぶ『日本の思想史』」
- ② 猪木武徳編著「高校生のための人物に学ぶ『日本の政治経済史』」
- ③ 池内 了編著「高校生のための人物に学ぶ『日本の科学史』」

本書籍で取り上げた人物は、高校生向けの「IIAS 塾ジュニアセミナー」に相応しいものとして選んだもので、日本の近代を彩った人物である。対象は高校生のみならず広く一般の方々とし、特に、大人の学び直しにも好適であると企画したものである。出版社はミネルヴァ書房（京都市）で2020年12月25日に発行した。定価は 2,400 円＋税。



4) 外部資金獲得の取り組み—三菱みらい育成財団への助成申請—

外部資金の獲得に取り組み、当該ジュニアセミナーの円滑な運営を図るため、日本の未来を創る人材の育成及び支援を標榜する「一般財団法人三菱みらい育成財団」との事前協議を行った。その結果、当該ジュニアセミナーの開催趣旨や意義、活動実績等に対する同財団の評価は高いものがあり、当該財団の助成公募メニューに基づき、ジュニアセミナーへの助成を獲得すべく、2021 年度助成金の応募申請を行った。

6. 新しい文明の萌芽を探索するプロジェクト

「ゲーテの会」は発足以来、2019 年度末で 79 回を迎えた。2019 年度からは第 4 ステージの共通テーマとして「新しい文明の萌芽を探る」を掲げているが、これを推進していくためには、これまで開催してきた実績を振り返り、各回の話題を再編整理し体系化を図り、これまでの実績の上に成り立つ文明論的脈絡を抽出して、今後のテーマ選定に反映させていく必要がある。

『新しい文明』の萌芽探索プロジェクトは、「ゲーテの会」のこれまでの開催テーマである「近代文明の在処」を探ることを旨とする個別の講演内容を整理し、それらと現代社会が投げかける文明論的課題を交差させることによって、「新たな文明」の萌芽を、市民と共に考え探求しようとするものである。

本プロジェクトは、けいはんな学研都市の建設理念でもある「東西文明の融合による新たな地球文明の創造」に資する「思想（世界観）」のオープンイノベーションを目指すものでもあり、国際高等研究所における 2021 年度の主要事業として位置づけることとする。これは、当該事業の今後の充実・発展と事業の企画・計画機能の強化を図る観点から、組織体制を構築・整備することを狙うものでもある。

来年度の本格的事業展開に先立って検討課題を整理し、またその推進体制を整える必要があり、月次会議の機会を利用して内部キックオフミーティングを開催して検討を進めた。

第 1 回内部キックオフミーティング：2020 年 10 月 18 日（日）

第 2 回内部キックオフミーティング：2020 年 11 月 15 日（日）

第 3 回内部キックオフミーティング：2020 年 12 月 20 日（日）

第 4 回内部キックオフミーティング：2021 年 1 月 15 日（金）

『5』研究活動に係る成果の発信強化・広報活動の充実

広く社会の動向を見極めながら、高等研における高度な研究活動を踏まえた存在意義の更なる訴求方策の検討（広義の広報活動）を進めることとし、より広く一般を対象とする発信力の強化に努めることは、公益財団法人である高等研にとって社会から求められる要件でもある。

一方、2019 年度において大口の個人寄付金の獲得となったが、潜在的に社会貢献への強い意志をお持ちの篤志家が居られる状況を踏まえ、高等研の活動成果や存在意義を積極的に社会に訴求する中で、新たな寄付の申し出に繋がる可能性があり得ることを経験したところである。

高等研の事業活動を広範に流布し、更なる外部資金獲得に繋げる努力を行う計画である。

1. 2020 年度広報活動

本件については、公益法人にとって不可欠な地道で継続性が求められる活動として取り組んだ。

(1) 2019 年度版アニュアルレポートの発行

例年通り 2019 年度アニュアルレポートを発行した。発行に際しては、内容充実の一方で経費削減に繋がるように編集方法及び発行手法の見直しを図った。

第 1 四半期において、2019 年度アニュアルレポートの取り纏め及び発行に向けて諸準備を進めたところ、8 月に 2019 年度アニュアルレポートの発行を終えて、関係者等に約 1300 部を配布した。

2. 京都スマートシティーエキスポ 2020 への参画協議

京都スマートシティーエキスポ 2020 は、新型コロナウイルス感染症への対応を踏まえた新たな事業実施形態として、デジタル(web)をベースとした次世代型バーチャルエキスポを目指すこととなった。

高等研は、10 月 27 日（火）、28 日（水）の両日の主行事に参画するとともに、今年から設けられたオンデマンド開催期間（10 月 29 日～12 月 31 日）に放映される 2 回の高等研セミナーの収録を京都府から受託した。事業名は「スマート社会やニューノーマル時代の人類が直面する社会的課題の克服や価値観の共有に係る調査研究事業」である。

(1) 特別企画「知の巨人 国際会議」

松本所長が座長を務める京都府主催の会議で、高等研が後援を行った。

日時：10 月 27 日（火）

場所：けいはんなプラザ

(2) 国際高等研究所パネルセッション「日本文化創出を考える」研究会

テーマ：「世界に発信する日本の文化力

～ニューノーマル時代の基盤構築に向けて～」

日時：10 月 28 日（水）13:00～14:30

場所：けいはんなプラザ

(3) 高等研オンラインセミナー

京都府から以下の委託事業を受け、新型コロナウイルス感染症の拡大という全人類が直面する危機に対して、「人類の未来と幸福のために、何を研究すべきかを研究する」ことを基本理念とする国際高等研究所の研究成果の紹介、および若手研究者等によるニューノーマル時代についてのオンラインセミナーを開催し、京都スマートシティーエキスポを通じて発信した。

名称：スマート社会やニューノーマル時代の人類が直面する社会的課題の克服や価値観の共有に係る調査研究事業

概要：けいはんな学研都市において、150 を超える研究機関・企業等が集積し、「文化・学術・研究」が高度に融合した都市として、誰もが快適に過ごせるスマート社会づくりに取り組んでいる。また、SDGs が目指す「誰一人取り残さない」持続可能で多様性と包摂性のある社会の実現を目指し、京都スマートシティーエキ

スポを開催している。第7回となるスマートシティエキスポ 2020 においては、(公財) 国際高等研究所松本 紘所長を中心に、国内外から有識者を招きニューノーマル時代の「人類に向けた提言」を行う特別企画「知の巨人 国際会議」を開催することとしており、当調査研究事業は「知の巨人 国際会議」のフォローアップ事業として実施し、その研究成果を京都スマートシティセミナー内で発信（オンラインセミナーの開催）するとともに提言をまとめる。

本事業の成果として、下記 2 本の動画とセミナーの内容をまとめた報告書を京都府に提出した。

1) 第1回オンラインセミナー（12月18日公開）

国際高等研究所の副所長が取り組む基幹プログラムの視点から、松本所長も交え、ニューノーマル時代についての提言を行った。

2) 第2回オンラインセミナー（12月18日公開）

多様な分野の第一線の若手若しくは中堅の研究者と松本所長によるニューノーマル時代についてのトークセッションを実施し、セッションの最後に松本所長から提言を発信した。

Ⅲ. 法人運営

『1』評議員会、理事会の開催状況

2020年度は、新型コロナウイルス感染症予防の観点から、評議員会、理事会の一部について、定款に基づく決議の省略を行い開催した。

1. 評議員会の開催

第82回評議員会	2020年	4月	24日	(決議の省略)
第83回評議員会	2020年	6月	18日	(決議の省略)
第84回評議員会	2020年	11月	11日	(決議の省略)
第85回評議員会	2021年	3月	30日	ホテルグランヴィア京都

2. 理事会の開催

第114回理事会	2020年	4月	9日	(決議の省略)
第115回理事会	2020年	6月	1日	(決議の省略)
第116回理事会	2020年	6月	18日	(決議の省略)
第117回理事会	2020年	9月	7日	(決議の省略)
第118回理事会	2020年	10月	23日	(決議の省略)
第119回理事会	2020年	12月	15日	国際高等研究所
第120回理事会	2021年	3月	2日	国際高等研究所

『2』賛助会員制度の導入に向けた取り組み

財務健全化を図る上で、高等研将来構想（マスタープラン）で明確化されるべき所要資金（望まれる事業運営と健全な法人運営に係る経費見積）と、基本財産運用益等の収入とのギャップを最小限に抑える自助努力を行うことが求められるものの、なおも収支ギャップを補う方策を検討しなければならない状況が見込まれる。

経営基盤委員会からの提言における「中長期的展望」として指摘のあった「法人としての会員制度の立ち上げと会費収入確保への期待」については、賛助会費収入が収支ギャップ

を補う収入源となり得る方策として期待され、継続的かつ安定した法人運営にとって重要な課題であることから、2019年度においてその具現化を図るための方策の検討に着手したところである。

2020年度においては、賛助会員制度に係る制度設計を進め、ステークホルダーとの十分な事前調整を行い、円滑な制度の立ち上げを図る計画としたが、新型コロナウイルス感染症拡大予防の観点から、外部関係者への積極的な働きかけができず、活動を留保した。

また、上半期の運営会議については、新型コロナウイルス感染症予防の観点から中止としたが、新型コロナウイルス感染症の動向を踏まえ、8月度から再開した。

下半期には、文部科学省科学研究費補助金「特定奨励費」の獲得を目指して、2021年度分申請を行うため、2020年度で終了する基幹プログラム3課題に代わる新たな課題探索を行い、運営会議において集中的に研究計画案策定を前倒しで進めた。

4月度運営会議：4月26日（日）京都府緊急事態宣言発出に伴い中止

5月度運営会議：5月中の開催を延期

8月度運営会議：8月4日（火）3密回避するとともに一部遠方出席者については、リモート出席として再開。時間の都合上、具体的な審議・検討は次回以降に延期

9月度運営会議：9月20日（日）

10月度運営会議：10月18日（日）

11月度運営会議：11月15日（日）

12月度運営会議：12月20日（日）

2021年1月度運営会議：2021年1月15日（金）

2021年2月度運営会議：2021年2月19日（金）

2021年3月度運営会議：2021年3月21日（日）

『3』大型施設・設備改修工事の実施状況

2020年でのフロア全廃へ対応するため、2019年度に引き続いて、2020年度は施設・設備計画に基づき、研究棟A及びレクチャーホール等の空調設備改修工事を実施した。

2020年度工事費の総額は7,931万円である。

『4』資産運用状況

2020年度においても引き続き資産運用の改善努力を行い、経営基盤委員会で検討された財務計画の趣旨に沿い効率的な運用に努めた。具体的には、満期償還債券1件および期日前償還債券2件ならびに売却債券3件による償還・売却資金を原資として、資産運用計画に基づき再運用を行い、資産運用の改善に繋げた。

2020年度の再運用の状況は以下に記載のとおりである。なお、再運用について

は、理事長、専務理事及び理事長の指名する役職員（法人運営部門統括及び総務 部長）により構成する資産運用委員会の審議を経て実施している。

1. 資産運用委員会の開催

第53回資産運用委員会：4月27日

第54回資産運用委員会：7月1日

第55回資産運用委員会：12月9日

2. 再運用の状況

- ・株式累積投資（るいとう）による株式の購入 4 銘柄 2.5 億円
- ・不動産投資信託（リート）の購入 8 銘柄 2 億円
- ・債券（仕組債）の購入 9 件 4.5 億円

※この他に、「るいとう」による株式の購入（1 銘柄）を実施したが、株式公開買付（TOB）の対象となったので、第 84 回評議員会の承認を得て応募を行った。

3. 債券の期日前償還

2021 年 3 月に仕組債の期日前償還 4 件計 2 億円が発生した。これらの再運用については、2021 年度に資産運用委員会を開催して審議する。

IV. 2020 年度（令和 2 年度）財務・収支実績

『1』経常収益の概要

経常収益の合計は、1 億 9,841 万円 8 千円となり、前年度比では 8,503 万 8 千円の減となった。また、予算比では 1,580 万 7 千円の減であった。

運用益については、引き続き一定のリスクに配慮した積極的な運用を実施した。基本財産運用益は前年度比 2,406 万 1 千円増の 1 億 139 万円で、特定資産運用益 9 万 9 千円をあわせて合計 1 億 149 万円となった。

受取補助金等は、京都府からの補助金 850 千円を計上した。

受取寄付金については、特別研究基金より研究活動に充当した振替額 700 万円と、同じく研究事業推進基金を取り崩した振替額 6,130 万円をあわせて受取寄付金等振替額として前年度比 808 万 9 千円減の 6,830 万円を計上した。受取寄付金の合計としては、前年度比 1 億 808 万 9 千円の減となったが、これは前年度に大口寄付金 1 億円があったためである。

施設利用料収入などを計上している雑収益については、交流活動「けいはんなゲーテの会」および「エジソンの会」の活動が新型コロナウイルス感染拡大の影響により一部延期などとなったこともあり前年度比 75 万 4 千円減の 2,777 万 7 千円となった。

『2』経常費用の概要

経常費用のうち事業費は、研究事業に直接要する費用に、全体の管理に要する費用から研究事業に寄与する部分を配賦計算に基づき按分した金額を加えて事業費としている。従って、管理費は全体の管理に要する費用のうち、事業費に按分した残りを管理費として計上している。

経常費用の合計は 1 億 6,787 万 7 千円となり、前年度比では 1 億 1,446 万 1 千円の減少となった。また、予算比では 2,401 万 3 千円の減であった。

事業費では、新型コロナウイルス感染拡大により「ジュニアセミナー」を始めとするイベント・研究活動等が延期あるいはオンラインの利用による実施となったため旅費交通費等が前年度を下回ったことに加えて、委託費を削減したことなどにより、事業費の合計は前年度比で 1,242 万 3 千円減の 1 億 5,363 万 4 千円となった。

管理費については、1,424 万 2 千円となったが、前年度に指定正味財産への振替（受取寄付金の特別研究基金への振替）1 億円があったことにより前年度比では 1 億 203 万 7 千円の減少となった。また、予算比では 541 万円の減であった。

『3』最終収支

経常収益と経常費用との差額に、保有株式の株式公開買付(TOB)への応募での売却差益等による基本財産評価損益等 568 万 2 千円を加えた当期経常増減額は 3,622 万 3 千円となった。これに空調設備工事にともなう既存空調設備等の除却損失 1,227 万 5 千円の当期経常外増減額をあわせた結果、当期一般正味財産増減額は、2,394 万 8 千円となり前年度比で 3,228 万 6 千円改善した。

また、基本財産と研究事業推進基金の増減を表す当期指定正味財産増減額は、8,112 万 4 千円で、前年度比で 1 億 7,475 万 1 千円改善した。これは、基本財産の評価損益等で大幅な評価益があったためである。新型コロナウイルス感染拡大等の影響によって 2019 年度末時点においては下落していた株式市場が、2020 年度末において大幅に上昇した影響により、投資有価証券の株式・債券に評価益 1 億 4,928 万円が発生した。このため、基本財産の評価損益等は、前年度比で 2 億 6,658 万 8 千円増加した。

以上の増減額をあわせた正味財産期末残高は、48 億 2,532 万 1 千円となり、前年度比では 1 億 507 万 3 千円の増加となった。また、予算比で 1 億 8,533 万 3 千円の増加であった。

『4』基金の取扱いについて

2020 年度の基本財産については、2020 年 3 月の評議員会において 2020 年度は基本財産より研究事業推進基金へ 8,000 万円の振替が承認決議されたが、新型コロナウイルス感染症の全国的な拡大により事業活動の自粛を余儀なくされたことや費用削減に努めたことなどによる収支改善のもと、2020 年度基本財産から研究事業推進基金への振替額は 6,000 万円とした。

同じく同年度の研究事業推進基金に関しては、2020 年度研究事業推進基金期首残高 4,130 万円に対して先の 6,000 万円を繰入れ、さらに 6,130 万円を受取寄付金等振替額に含めて経常収益に振替えた結果、2020 年度期末の研究事業推進基金残高は 4,000 万円とした。

『5』今後の見通し

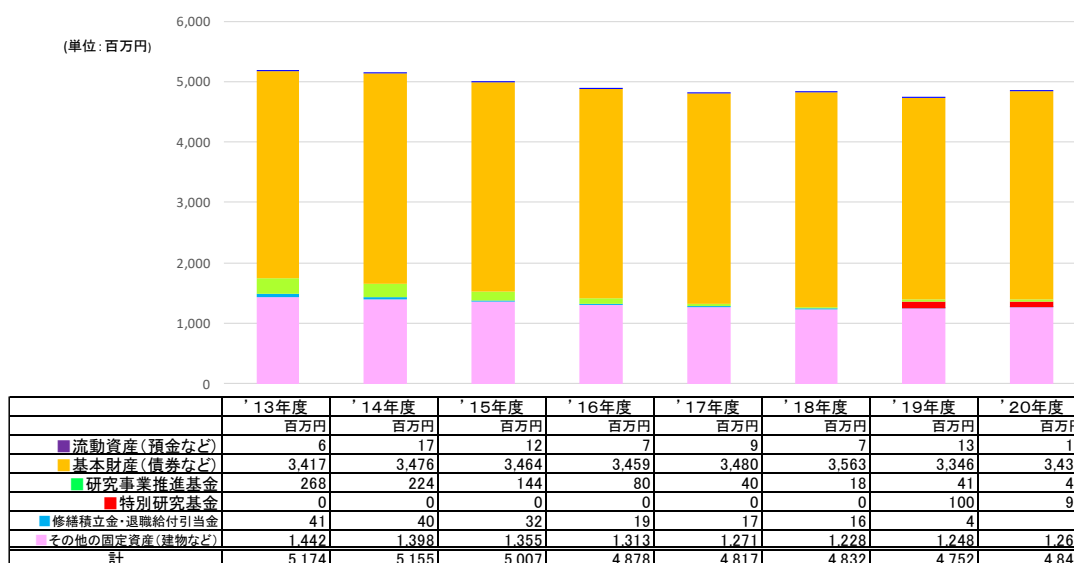
2021 年度においては、基本財産および研究事業推進基金の振替は予定しない。

今後の財政計画については、引き続き「経営基盤委員会」の提言を踏まえ、社会に認められ、必要とされる事業展開を充実強化することで、収支相償に向けた抜本的な取り組みをさらに進めて行くこととする。

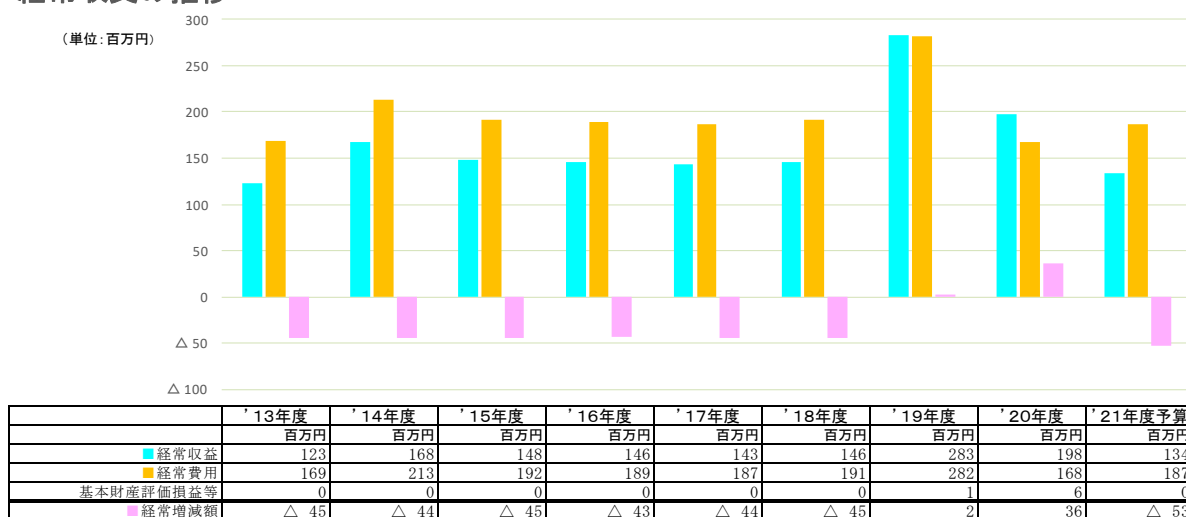
以上

参考資料(グラフ)

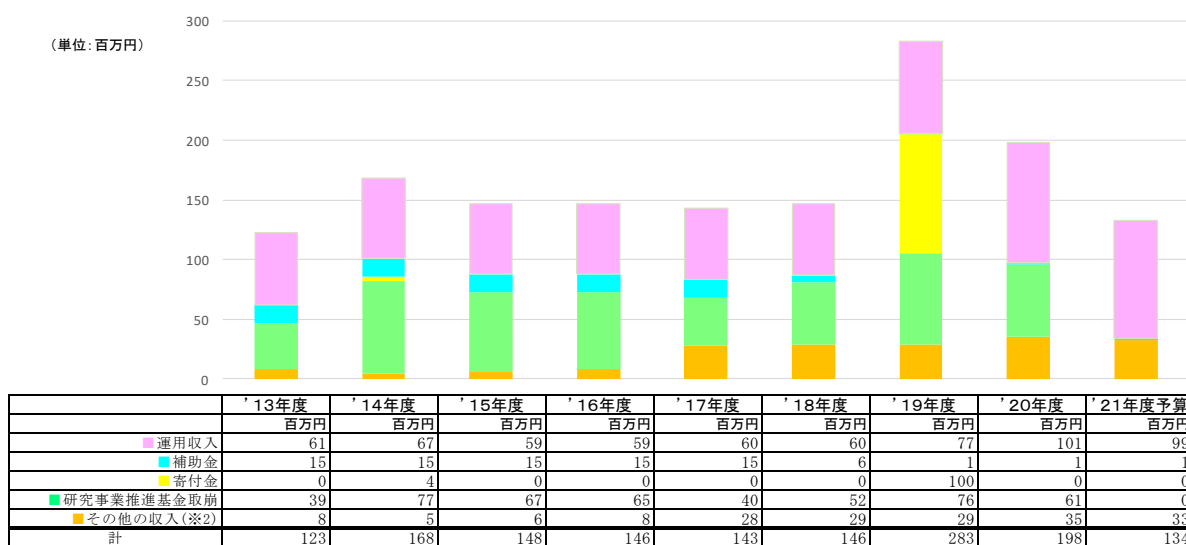
保有資産の推移



経常収支の推移



収入の推移



※2 雑収入(施設使用料)+特別研究基金からの繰り入れ

付属明細書 1

公益財団法人国際高等研究所 2020 年度（令和 2 年度）事業活動の展開 研究事業活動

I. 基幹プログラム	1
1. SDGs 時代における科学技術のあり方～ブダペスト宣言から 20 年～	1
2. 第 4 次産業革命への適応～社会経済システムの再編成～	2
3. 教育を基軸とした住民参加型地域振興	3
II. 研究企画推進会議	7

I. 基幹プログラム

1. SDGs 時代における科学技術のあり方～ブダペスト宣言から 20 年～

(1) 趣旨

21 世紀に入り、社会経済の構造と科学技術のあり方が大きく変化している。特にここ数年、気候変動パリ協定、持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals; SDGs）の国連全加盟国一致による決議等の国際協調の流れと、一国主義、保護主義、権威主義国家の台頭と波及が、同時に起こっている。世界は今や複雑で不透明な時代を迎えているとみることができる。この変化の技術的基盤は、人工知能（AI）とビッグデータを中心とする情報通信技術の革新にあり、「デジタル革命と SDGs とハイテク覇権の時代」といえる。こうした歴史的な転換期において、今後の科学技術のあり方、社会経済と人々との関係について、目指す価値、政策、研究の方法、教育、ファンディング、大学マネジメントなどの各レベルで改革が迫られている。

本研究では、以下の二つに焦点を当てる。第一に、新しい時代における科学技術と社会との契約、責務、実践として重要かつ世界的に大きな潮流になると見込まれる STI for SDGs（SDGs 達成のための科学技術イノベーション）の枠組みである。第二に、1999 年に世界の科学技術コミュニティが合意し、その後各国の科学技術政策の思想的基盤となっているブダペスト宣言（21 世紀の科学と科学の使用に関する世界宣言）である。この二つを軸に、変化の激しい時代の、科学技術のあり方、科学者コミュニティの役割と責任、思想的基盤、異分野融合型研究体制のデザインについて検討する。

(2) 研究組織

有本 建男	【研究代表者】国際高等研究所チーフリサーチフェロー（2020 年度副所長） 政策研究大学院大学客員教授 科学技術振興機構研究開発戦略センター上席フェロー
大竹 暁	東京大学未来ビジョン研究センター客員研究員
隠岐 さや香	名古屋大学大学院経済学研究科教授
狩野 光伸	岡山大学副理事・大学院ヘルスシステム統合科学研究科教授、 外務大臣次席科学技術顧問
小寺 秀俊	理化学研究所理事、OECD 科学技術委員会日本代表・副議長 京都大学名誉教授・特定教授
駒井 章治	東京国際工科専門職大学工科学部情報工学科教授
新福 洋子	広島大学大学院医系科学研究科教授
宮野 公樹	京都大学学際融合教育研究推進センター准教授

(3) 研究会開催

すべてオンライン研究会、報告書取りまとめに係る議論を行った。

第 1 回：2020 年 5 月 25 日

第 2 回：2020 年 6 月 3 日

第 3 回：2020 年 7 月 28 日

(4) 報告書

「SDGs とコロナパンデミックの時代における科学技術のあり方を考える」(2020 年 10 月発行)
"Considering Science and Technology in the Age of SDGs and COVID-19 Pandemic",
March 2021

SDGs 時代の科学技術の主題とその方法や仕組み、並びにコロナパンデミックに遭遇した現実を前に科学技術と科学者技術者のあり方について、根本から問い直した報告書である。

2. 第 4 次産業革命への適応～社会経済システムの再編成～

(1) 趣旨

現在進行中の第 4 次産業革命が私たちの社会・経済に及ぼす影響は測り知れない。過去 3 度の産業革命のいずれもが、経済の成長・発展、生活の利便性・快適性の向上をもたらしたが、4 度目の産業革命は、そのスピードが余りにも速いため、変革への社会的適応が容易でなく、経済社会に根源的な変容を迫りつつある。

工場の無人化、事務労働の人工知能 (AI) による代替、医師、弁護士等の専門職の職能の AI による代替などが限りなく進行する。その結果、深刻な雇用問題、IoP と IoT (ヒトとモノのインターネット) の進展、限界費用ゼロ社会の到来、シェア・エコノミーの進展等々の経済社会の変容は堰き止め難い潮流であり、それへの適切な適応が求められる。また、新しい社会経済を読み解くためには、工業化社会を前提に据える既成経済学のパラダイム・シフトが求められている。以上のような設問に答えることが、本研究の目指すところである。

(2) 研究組織

佐和 隆光	【研究代表者】国際高等研究所チーフリサーチフェロー (2020 年度副所長)
依田 高典	京都大学大学院経済学研究科教授
大西 宏一郎	早稲田大学教育・総合科学学術院准教授
下村 研一	神戸大学経済経営研究所教授
新海 哲哉	関西学院大学大学院経済学研究科教授
二神 孝一	大阪大学大学院経済学研究科教授
宮脇 正晴	立命館大学大学院法学研究科教授
若森 直樹	東京大学大学院経済学研究科講師

(3) 研究会開催

於国際高等研究所

第 1 回 : 2020 年 9 月 17 日

報告書論考について解説及び質疑応答

第 4 次産業革命の影響の評価に関わる問題提起に関する意見交換

第 2 回 : 2020 年 10 月 16 日

【外部講師】植村祐嗣 (日本インタラクティブ広告協会 (JIAA) 常務理事)

「インターネット (広告) の不易流行」

佐和隆光「日本のマスメディアはどうなるのか」

(4) 報告書

「第4次産業革命への適応～社会経済システムの再編成～」(2020年9月発行)

"Adaptation to the Fourth Industrial Revolution – Reorganization of the Socioeconomic System –", March 2021

人工知能をはじめとする ICT 機器の進化と普及が及ぼす社会経済的影響を明示化し、ポジティブな影響を活かし、ネガティブな影響を防ぐための方策について探究した報告書である。

3. 教育を基軸とした住民参加型地域振興

趣旨

けいはんな学研都市は、街びらきから 30 余年の間に、約 150 の研究機関や大学、文化施設が設置され、道路や公共交通機関の整備が進み、人口も増加した。これからの 30 年は、ハード面の充実に加え、人々の新たな関係性の構築や幸福感の醸成といったソフト面での充実も重要になるであろう。本研究は教育を基軸とし、住民参加型の手法も活用しながら、この地域が国際教育都市として発展する方向——「けいはんな学研都市地域を軸とした教育システム輸出拠点の形成」と、身心の健康維持促進の実践の場となる方向——「けいはんな学研都市地域の振興に向けた具体的試み～ヘルスリテラシー向上を通して～」の二つを追究し、けいはんな学研都市地域の振興に貢献することを目指す。

<1>けいはんな学研都市地域を軸とした教育システム輸出拠点の形成

(1) 趣旨

けいはんな学研都市地域は、有数の高等教育機関と研究所群が集積し、教育産業拠点としての潜在力を備えている。途上国から関心の高い特別教育活動は日本の文化的土壌と不可分であるため、この地域に根付く日本の歴史、伝統、文化は特長として生かすことができる。このようなけいはんな学研都市地域は、日本型教育システムの海外展開拠点となり、途上国からの教員研修の受け入れ先となることが望まれる。更には、欧米大学の東アジア拠点として、この地域が中継貿易基地となる未来像も考えられる。

本研究では、「国際教育都市としてのけいはんな」の可能性を探り、けいはんな学研都市地域を軸とした教育システム輸出拠点の形成に向けた活動を行う。具体的には、以下三点に焦点を当てる。

第一にオフショアスクールの世界的動向の調査、日本型教育の海外展開における条件等の調査である。第二に、けいはんな学研都市地域における途上国対象の日本型教育の指導者養成センター設置を構想し、その具体化に向けての条件等についての調査研究の推進である。第三に、こうした教育輸出拠点の形成が、学研都市地域に居住する住民の生涯学習機会の充実や深化にどのような関わりをもつのかを検討する。特に、先端科学と歴史、伝統、文化といった文化的資本が交錯する都市空間において、諸外国から評価される一方で今や忘れられがちな規律や礼儀を重んじる精神、倫理道德教育が地域住民にどのようなインパクトを与える可能性があるのかを探りたい。

(2) 研究組織

高見 茂	【研究代表者】国際高等研究所チーフリサーチフェロー（2020 年度副所長） 京都光華女子大学学長、京都大学学際融合教育研究推進センター特任教授
郭 暁博	神戸松陰女子学院大学教育学部講師
島田 健太郎	京都大学学際融合教育研究推進センター特任講師、開志専門職大学事業創造学部助手
白銀 研五	びわこ学院大学教育福祉学部講師
杉本 均	京都大学大学院教育学研究科教授
全 京和	京都光華女子大学こども教育学部講師
谷本 寛文	京都光華女子大学こども教育学部准教授
智原 江美	京都光華女子大学こども教育学部教授
中島 悠介	大阪大谷大学教育学部准教授
長久 善樹	啓明学院社会科教諭
南部 広孝	京都大学大学院教育学研究科教授
西川 潤	京都光華女子大学健康科学部講師
服部 憲児	京都大学大学院教育学研究科准教授
福田 一	啓明学院英語科教諭
松本 圭将	京都大学大学院教育学研究科博士後期課程
宮村 裕子	畿央大学教育学部准教授
廖 于晴	京都大学学際融合教育研究推進センター特任助教
山田 基靖	摺河学園学園長(官民人事交流により外務省より派遣中)
渡辺 雅幸	びわこ学院大学教育福祉学部講師

(3) 研究会開催

報告書の内容に係る議論をメールにて行った。

(4) 報告書

「教育システム輸出入拠点の形成～国際教育都市「けいはんな」の可能性を探る～」(2020 年 9 月発行)

"Creating a Hub for Import / Export of the Educational System – Exploring the Possibility of Keihanna, an International Educational City –", March 2021

諸外国の教育制度やオフショア・オンショアスクールの世界的動向を踏まえ、教育システム輸出入拠点の形成に向けた課題や視点を考えると共に、国際教育都市としての「けいはんな」の可能性を考察した報告書である。

<2>けいはんな学研都市地域の振興に向けた具体的試み～ヘルスリテラシー向上を通して～

(1) 趣旨

本研究は、2015 から 17 年度にかけて国際高等研究所で行った「けいはんな未来」懇談会、及び「けいはんな未来」専門検討部会で提案された先端幸福創造都市の実現に向け、更に具体的に、けいはんな学研都市地域の振興を図る方策を検討するために発足したものである。

けいはんな学研都市地域の科学技術研究機関を集積した街づくり、研究機関のみならず住民生活や地域性を意識した街づくりは、日本が喫緊の課題として抱える少子高齢化等の社会的課題や、地球規模課題に対峙する世界の動向に対し、地域発の具体的な対応を打ち出す可

能性を備える。

本研究では、人間の活動の基本的要素に目を向け、この地域に働く人々や住民一人一人の生活、健康、教育に焦点を当てる。特に、基本的健康情報を取得、理解し、評価、活用する能力であるヘルスリテラシーの向上は、総合的な地域振興の要素の一つになるとの考えのもと、先端幸福創造都市実現の具体軸として、ヘルスリテラシーに着目することとした。具体的には、以下三点に焦点を当てる。

第一に、けいはんな学研都市地域の住民やこの地域で働く人々の、ヘルスリテラシー向上のための生涯学習機会の充実に向けた条件とその整備の方策を考察する。第二に、この地域の研究開発、産業、自然、歴史、文化的土壌、農業、食等の周辺資源を生かす健康創出促進好循環モデルの形成を試みる。第三に、ヘルスリテラシー向上のための学習モデルや教育モデルの開発、移出、輸出を目指す。

(2) 研究組織

高見 茂	【研究代表者】国際高等研究所チーフリサーチフェロー（2020 年度副所長）、 京都光華女子大学学長、京都大学学際融合教育研究推進センター特任教授
有山 将人	生駒市都市整備部都市計画課長
池田 一也	京田辺市企画政策部副部長、企画調整室長兼務
大原 真仁	精華町総務部企画調整課長
加藤 博和	名古屋大学大学院環境学研究科教授
坂野 寿和	株式会社国際電気通信基礎技術研究所(ATR)事業開発室担当部長
坂本 悟	奈良県県土マネジメント部地域デザイン推進局県土利用政策室長
重松 千昭	公益財団法人関西文化学術研究都市推進機構新産業創出交流センター長
島田 和幸	京都府商工労働観光部文化学術研究都市推進課長
高橋 賢藏	サントリーグローバルイノベーションセンター株式会社取締役会長
寺崎 肇	元関西文化学術研究都市推進機構ヘルスケア事業推進室プロジェクトディレクター
中村 佳正	京都大学大学院情報学研究科教授
檜舘 孝寿	株式会社京都総合経済研究所取締役調査部長
松山 美彦	奈良市都市整備部都市計画課長
山口 一成	木津川市マチオモイ部学研企画課長
山田 武士	NTT コミュニケーション科学基礎研究所所長株式

(3) 研究会開催

於国際高等研究所、オンライン併用

第 1 回：2020 年 9 月 28 日

〔講演〕川上浩司（京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻教授）
「ヘルスケア x デジタルと医学研究」

第 2 回：2021 年 2 月 9 日

〔講演〕石川ひろの先生（帝京大学大学院公衆衛生学研究科教授）
「ヘルスリテラシーの評価法」

第 3 回：2021 年 3 月 12 日

〔講演〕木原正博（京都大学名誉教授）
「ソーシャルマーケティングその理論と応用」

〔講演〕木原雅子（京都大学学際融合教育研究推進センター特任教授、一般財団法人日本こども財団理事長）

「ソーシャルマーケティング的アプローチによるプロジェクトの例
－WYSH プロジェクト－若者の健康と幸せのためのプロジェクト」

（4）報告書

ヘルスリテラシーの内容とその向上に取り組む活動を、学術、社会、地域の側面から調査し、ヘルスリテラシーに係る課題やけいはんな学研都市地域の振興に向けた今後の具体的展開について検討した結果を、2021 年度に中間報告として取りまとめる予定である。

けいはんな学研都市広報誌 2020.12.Vol.47

けいはんな view(13 頁)トピック 3 で紹介された基幹プログラムの報告書

TOPICS 3

国際高等研究所 基幹プログラムの 報告書を発刊



写真左から高見茂氏/佐和隆光氏/松本紘氏/有本建男氏

公益財団法人国際高等研究所は、1984年の創立以来、「人類の未来と幸福のために何を研究するかを研究する」ことを基本理念として活動をしています。

人間や人々の生活を意識した研究活動を通じ、持続可能な社会の実現に向け人類が直面している課題はなにか、そしてその解決の方向性を提示していくことを目指しています。

この度、2018年度から2020年度まで、松本紘所長のもと三人の副所長で実施した基幹プログラムの報告書を発刊しました。

報告書(PDF)は国際高等研究所の
ウェブページよりご覧いただけます



「SDGsとコロナパンデミックの時代における科学技術のあり方を考える」

(2020年10月発刊)

近代科学技術の何を残し、何を变えるのか。SDGs時代の科学技術のあり方とその方法や仕組みを問い直し、コロナパンデミックに遭遇した現実を前に科学技術と科学者技術者のあり様について根本から考えた報告です。

研究代表者：有本 建男 国際高等研究所副所長、政策研究大学院大学客員教授
科学技術振興機構研究開発戦略センター上席フェロー

「第4次産業革命への適応～社会経済システムの再編成～」

(2020年9月発刊)

第4次産業革命とは何か。第4次産業革命にともない社会はどのように変化し、何を課題として抱えているのか。メディア、法律、イノベーション、経済学、労働、競争政策、産業構造における変容を経済学や法学の観点から論じます。

研究代表者：佐和 隆光 国際高等研究所副所長、京都大学名誉教授

「教育システム輸出入拠点の形成～国際教育都市『けいはんな』の可能性を探る～」

(2020年9月発刊)

諸外国の教育制度やオフショア・オンショアスクールの世界的動向を踏まえ、教育システム輸出入拠点の形成に向けた課題や視点を考えると共に、国際教育都市としての『けいはんな』の可能性を探ります。

研究代表者：高見 茂 国際高等研究所副所長、京都光華女子大学学長
京都大学学際融合教育研究推進センター特任教授

Ⅱ. 研究企画推進会議

(1) 目的

研究活動に係る諸課題に関する所長の諮問に応じた検討、所長への建議あるいは助言・提案、その他研究事業の企画及び円滑な推進を図るために必要な事項を検討する。

(2) 委員

2015 年度に発足、一期 2 年 2019 年度に第三期を迎えた。自然科学、人文科学、社会科学等、幅広い学問領域の学識経験者を委員とする。

委員：

榊 裕之	学校法人トヨタ学園常務理事、豊田工業大学前学長、東京大学名誉教授〈議長〉
稲賀 繁美	京都精華大学国際文化学部教授・学部長
小寺 秀俊	理化学研究所理事、OECD 科学技術委員会日本代表・副議長、 京都大学名誉教授・特定教授
高橋 義人	平安女学院大学国際観光学部特任教授、京都大学名誉教授
中村 道治	科学技術振興機構顧問
西尾 章治郎	大阪大学総長
吉川 左紀子	京都芸術大学学長・同大学文明哲学研究所所長、 京都大学フィールド科学教育研究センター特任教授、京都大学名誉教授

(3) 会議開催

日時：2020 年 12 月 10 日（木）14:00～17:00

場所：国際高等研究所 ※オンライン併用

概要：国際高等研究所の活動報告を行うと共に、今後のあり方、来年度以降の研究活動の方向性などについて、助言をいただいた。概要は以下の通り。

○学問の貢献の可能性とコロナ禍における情報デザイン

- ・科学の社会への責務の実現は重要であり、実現の方策を考える時節である。これは文理一体で取り組まないと解けない問いである。
- ・文理融合が難しいのは、関与者の基礎知識に差異があることが大きい。日本の近年の教育制度は、基礎知識の蓄積を軽視してしまった。重要なのは、ひとりの人間の中に文理が融合されていることであり、そのような人材をどう生み出していくのかは、日本が抱える課題である。
- ・過去の産業革命をふり返ると、科学技術の光と影が現れる。専門家集団だけ、当事者だけ、だと基本的な人間感覚を失う可能性があるという教訓であって、人間感覚を実装の過程で意識する必要がある。
- ・初代所長の岡本道雄先生も言及されていたが、危機の時代をどう導くのか。学者の役割はそういったところにもあるはずだ。科学や科学技術の実装に伴う善悪、科学文明の光と影を考えることも学者の役割の一つであろう。今このコロナ禍において、その役割を果たし広く社会に発信することが、高等研の存在意義の一つであろう。

○文化的土壌と高等研の特徴

- ・文化活動、知的労働の価値を認識する社会であるとよい。日本はそういった部分への金銭的人的投資に躊躇する雰囲気があり、文化的な土壌をもっと培いたい。

- ・ 2030 年アジェンダの「誰ひとり取り残さない」という理念はすなわち、**happiness**、幸福が人類共通の価値ということを、世界中の人々が再認識したということであろう。高等研の理念に通底する。
- ・ けいはんな学研都市は、知識を有する住民、企業、研究機関があり、日本の文化や価値観の原点もある。生涯学習や情報共有のモデル地区となる条件が整った地域である。
- ・ 高等研が持つ雰囲気、人々が集い、語り、普段とは異なる時間軸で考えることができる環境は、生かしていきたい。

以上

公益財団法人国際高等研究所
2020 年度（令和 2 年度）事業活動の展開
交流事業活動

I. 『集合知ネットワーク』（きづ会議）構築プロジェクト	1
II. 『エジソンの会』	2
III. けいはんな哲学カフェ『ゲーテの会』	5
IV. 『独立自尊の志』養成プログラム『IIAS 塾ジュニアセミナー』	8

『集合知ネットワーク』（きづ会議）構築プロジェクト」

（１）目的

各方面の研究者を対面やオンラインで招集し、今後必要と考えられるテーマについて提案し、議論を深め、ここから各テーマの思想的、技術的展開と社会実装の在り方を議論する。更にここで得られた議論を社会に実装する方略についても検討を行う。

（２）研究会開催（日時 場所：テーマ）

通算	開催日	会議方式	テーマ及び基調報告・話題提供者
8	2020.4.28	オンライン	NHK 教育プログラム制作
9	2020.5.26	オンライン	能楽の継承
10	2020.6.30	オンライン	コロナ禍の中等，高校教育
11	2020.7.28	オンライン	書道と教育，オンライン
12	2020.8.27	オンライン	将棋界の棋士のあり様
13	2020.9.29	オンライン	都市の発生と都市計画
14	2020.10.27	オンライン	アグリテック：路地物に資する技術
15	2020.11.24	オンライン	カブトムシの生態
16	2020.12.22	オンライン	サケとコミュニティのあり方
17	2021.1.26	オンライン	若者（10代）の貧困について
18	2021.2.25	オンライン	映画制作について
19	2021.3.30	オンライン	震災から10年。防災、土木を考える。

（注）研究組織構成員は、以下の各氏。

【研究代表者】

駒井章治 東京国際工科専門職大学工科学部情報工学科教授
国際高等研究所客員研究員

【参加研究者】

宮野公樹 京都大学学際融合教育研究推進センター准教授
国際高等研究所客員研究員

中尾央 南山大学人文学部人類文化学科准教授

中村征樹 大阪大学全学教育推進機構准教授

杉谷和哉 京都大学大学院 京都大学大学院 文学研究科 特定研究員
国際高等研究所 特任研究員

定藤博子 摂南大学経済学部准教授

井出和希 京都大学 iPS 研究所特定助教

森本智史 慶應義塾大学先導研究センター
論理と感性のグローバル研究センター特任助教

久木田水生	名古屋大学大学院情報科学研究科准教授
安藤悠太	京都大学大学院工学研究科 マイクロエンジニアリング専攻博士後期課程
阪井英隆	パナソニック株式会社
田島知之	京都大学宇宙総合学研究ユニット特定助教
梅若基徳	能楽師
塩尻かおり	龍谷大学農学部准教授
田畑菜峰	京都大学大学院生命科学研究科・博士課程学生 理化学研究所 CDB 染色体分配研究チーム
山下英里華	大阪大学大学院医学系研究科特任研究員
成勢卓裕	株式会社 Legmin
福永真弓	東京大学大学院新領域創成科学研究科准教授
ゲスト	
2020.1（第6回）	斉藤卓也氏（文部科学省産業連携・地域支援課長）
2020.2（第7回）	桑島修一郎氏（京都大学産業連携本部特任教授 元経済産業省産業技術環境局産業技術政策課技術戦略政策官）
2020.4（第8回）	村松 秀氏（NHK チーフ・プロデューサー）
2020.5（第9回）	梅若基徳氏（能楽師）
2020.6（第10回）	西村準吉氏（佼成学園女子中学高等学校教頭、 佼成学園統括進路指導部長）
2020.7（第11回）	渡邊富岳氏（書道家：博士（書道学））
2020.8（第12回）	糸谷哲郎氏（棋士）
2020.9（第13回）	小野 悠氏（豊橋技科大 建築・都市システム学系講師）
2020.10（第14回）	成勢卓裕氏（Legmin 代表取締役）
2020.11（第15回）	小島 渉氏（山口大学 大学院創成科学研究科）
2020.12（第16回）	福永真弓氏（東京大学大学院 新領域創成科学研究科）
2021.1（第17回）	今井紀明氏（株式会社 DxP 代表）
2021.2（第18回）	竹本祥乃氏（映画監督）
2021.3（第19回）	高橋良和（京都大学大学院工学研究科社会基盤工学専攻教授）

以上

『エジソンの会』

エジソンの会は、けいはんな学研都市が標榜する「立地機関間の連携とそれによる成果の創出」を促進するために、高等研が知的ハブとしての役割を果たし、立地機関の研究者や技術者のコミュニティを形成し、具体的な「オープンイノベーション」の成功事例の確立に寄与することを目的として発足したものである。2020 年度も昨年度に引き続きオープン・セミナーの開催を重点的に事業展開した。

◎オープン・セミナー

第 35 回会合：8 月 7 日（金） 於国際高等研究所レクチャーホール

主テーマ：「デジタルトランスフォーメーション時代におけるサイバーセキュリティ」

IoT の発展により、ハードウェア、ソフトウェア、サービス、情報を含めたあらゆるものがネットワークを介して接続され、現実世界と仮想空間の繋がりはますます拡大する様相を見せています。サプライチェーンがネットワークで結ばれ、国を超えたエコシステムの確立が世界に繁栄をもたらす一方で、その脆弱性は世界規模で広範囲な影響を与え、これまでには考えられなかった脅威が年々増えています。今まさに攻撃の全体像を把握し、リアルタイム性を持った総合的な対策が求められています。目まぐるしく変化するサイバー環境において、新たに発生するサイバー攻撃の現状を理解するとともに、今後の動向および対策について考究します。

講演：「サイバー環境と脅威を Before & After で観察して得られる新たな対策方針」

講師：名和 利男氏 サイバーディフェンス研究所 専務理事／上席分析官
兼 Nihon Cyber Defence(英国) ディレクター

インタラクティブ・セッション

上田 修功氏 エジソンの会スーパーバイザー

参加者：18 機関 38 名

（注）当初登壇をお願いしていた佐々木良一教授については、新型コロナウイルス感染拡大に伴う所属大学教員の国内出張に関するガイドラインにより、来所が取りやめとなった。

第 36 回会合：2020 年 11 月 18 日（水）

主テーマ：「技術革新が産み出すセンサ/センシング技術の進化」

あらゆるものがネットワークにつながる IoE（Internet of Everything）時代において、センサ・デバイスネットワークは産業革新をもたらし、AI やビッグデータ等の新たな技術とともに社会を大きく進展させています。センシング技術がボー

ダレスなつながりを見せる中、情報を的確に取得するためのセンシング技術開発が重要な課題となり、今日では SNS 情報等のビッグデータと組み合わせて、広域モニタリングにより環境そのものを仮想空間へと取り込む技術も進化しています。センシングの最先端技術と展望に触れて頂くことで、今後の研究や具体的な産業革新をどのように実現させていくことが出来るのか、Society5.0 時代の新たな価値の創出にどのように活かされていくのか、理解を深めるとともに今後の取り組みについて考究します。

講演：「スマート社会の実現に向けた次世代センサ/センシング技術の開発」

講師：鎌田 俊英氏 国立研究開発法人産業技術総合研究所
センシングシステム研究センター長

講演：「人と機械を繋ぐセンシング技術の展望」

講師：諏訪 正樹氏 オムロン サイニックエックス株式会社 代表取締役社長

インタラクティブ・セッション

上田 修功氏 エジソンの会スーパーバイザー

参加者：26 機関 37 名

以上

「けいはんな哲学カフェ『ゲーテの会』」

高等研の知的資源と人的ネットワークを活用して、知的連携の促進とそのための土壌醸成を図ることを目的として、「満月の夜開くけいはんな哲学カフェ“ゲーテの会”」を2013年度に立ち上げ、原則として毎月の満月の夜に公開セミナーを企画・開催して2020年度末までに84回の開催実績を重ねるに至っており、高等研が関西文化学術研究都市の中核機関として、相互の連携や知的活動、さらには参加者相互の人脈構築や交流の中心的役割を担うという「知的ハブ」機能を果たせるものに育て上げてきたと考えている。

2年間を一つのステージをして捉えて企画しており、2013年度からの第1ステージは「経済至上主義、科学技術至上主義からの脱却を求めて」、2015年度からの第2ステージは「日本の未来を拓くよすが（拠）を求めて」、2017年度からの第3ステージは「未来に向かう人類の英知を探る」であった。2019年度からの第4ステージでは、『次代を見据え、東西の架け橋たらんとした先覚者』の思想と行動を尋ねる、あるいは『日本と世界の歴史の転換点で転轍機を動かした先覚者』の事跡を辿り、『新しい文明』の萌芽を探る。」と題した新規展開を図っている。

2020年度は年間に10回の開催を計画していたが、緊急事態宣言が発令された4月から6月、2021年の1月と2月に予定していた講演については、新型コロナウイルス感染症予防の観点から開催を自粛して来期に延期した。2020年6月22日に高等研の交流事業に関する感染防止ガイドラインを策定し、2020年7月の第80回会合からガイドラインを順守しつつ、定員を半分に減らして再開し、本年度は下記のとおり定例会を5回開催した、延べ114名の参加者を得て、1回当たりでは定員25名に対し平均約23名の参加者を得て、安定した活動実績を示した。

第80回：2020年7月21日（火）

分野：思想・文学分野

講演：「三島由紀夫」、空っぽになってしまった日本を衝く

講師：高橋 義人 京都大学名誉教授、平安女学院大学特任教授

講演概要：『豊饒の海』最終巻に、京都醍醐寺近くの国道沿いの自動車捨場の場面が出てくる。この場面は日本文化の死の象徴になっている。日本文化が死に絶えてゆくのをどうにかして救いたい。そのために三島由紀夫は多くを書き、多くを戦った。『豊饒の海』に日本文化が滅びゆく近代史が描かれているとすれば、『文化防衛論』には瀕死の日本文化を救おうとする三島の命がけの治療法が記されている。今日、日本人はフラグメントと化している。それは、今の日本人に時間的連続性と空間的連続性が断たれているからである。満開の桜の花を見て、紀貫之や西行の和歌を思い浮かべるとき、過去と現在は時間的に連続する。花見先で知人に会い、今日はいいい花見日和ですねと談笑すれば、空間的連続性が生まれ、人は幸せになる。花と同様、文化は人に時間的連続性と空間的連続性を与えてくれる。文化は

贅沢品ではなく、人間の生活にとって本質的なものである。そうした文化の重要性が分からないばかりか、それを弾圧しようとする人たちが国の内外にいる。それに対しては戦わなければならない。その行為を三島は「刀」と呼び、「菊と刀」という文武両道に日本人の精神の基本構造を見いだした。さらには、和辻哲郎、津田左右吉に沿いつつ、彼独自の象徴天皇制論を展開した。三島の死後、日本は「菊と刀」の国から「菊と金」の国に向う道を加速させている。そんな病める日本への処方箋ははたしてあるのだろうか。三島由紀夫とみなさまと一緒に考えたい。

第 81 回：8 月 24 日（月）

分野：科学・技術分野

講演：「無意識の哲学」により文化と思想に大きな影響を与えた人物『フロイト』

ー精神分析入門ー

講師：北山 修 九州大学名誉教授、精神科医

講演概要：精神分析はメタサイコロジーや深層心理学と言われるが、「メタ」が「高次の」という意味となるなら実に偉そうなので、私は深層心理学という言葉が好みである。深層とは高いところではなく、裏側や奥であり、それは本人にすら気づかれていないことである。時には闇に隠れたもので「うがった見方」をしないと見えないのだが。例えば症状には無意識の意味があると考え、報告された夢の話はいつも加工されているので夢も潜在夢こそが本当に見られた夢だと言われることになる。その心の在り方を地図のように考え、広がりや空間のような捉え方をするなら、無意識、前意識、意識の 3 つの領域にわかれるとフロイトは考えた。日本語でも言うように、本音と建前、表と裏と分けてその間があるという発想である。次いで力関係から見た無意識というのは、その裏側にあるものがダムのようにせき止められている、抑圧されていると捉えられている。特に蒸気機関を眺めていた時代の人々は、押さえつけられたものには何かエネルギーがあり、管理に失敗すると暴走をし始めるというイメージを共有していた。

第 82 回：10 月 2 日（金）

分野：科学・技術分野

講演：「応用をやるなら基礎をやれ」化学者たちの京都学派

ー福井謙一をはじめとする喜多源逸の後継者たちー

講師：古川 安 総合研究大学院大学客員研究員、東京大学非常勤講師

講演概要：戦前から戦中にかけて京都大学工学部工業化学科教授の喜多源逸は、「化学の京都学派」と呼ばれる学派をつくり、独自の学風を植え付けた。その門下からは、桜田一郎、兒玉信次郎、古川淳二、小田良平から、ノーベル化学賞受賞者の福井謙一、野依良治、吉野彰らへと連なる才気あふれる化学者の一群が輩出した。理学部ではなく工学部でありながら「応用をやるなら基礎をやれ」という喜

多の理念のもと、「化学の京都学派」は高分子化学、有機合成化学、量子化学など関連基礎分野の開拓とその研究者養成に顕著な役割を果たした。本講演では、とくに創始者の喜多源逸（1883-1952）とその弟子で日本初のノーベル化学賞受賞者の福井謙一（1918-1998）の研究者・教育者としての生き方、考え方に注目することで京都学派の学風を考え、科学技術における創造性や人材育成のあり方を考えるヒントを探って頂きたい。

第 83 回：11 月 5 日（木）

分野：政治・経済分野

講演：「should の世界と how to の世界を問う。

統治理論の探求者『ニッコロ・マキアヴェッリ』

講師：澤井 繁男 元関西大学文学部教授、作家

講演概要：タイトルに2つの英単語を置いたのは、宗教（倫理の世界）と方途（道德の世界）をわかりやすく説くため、その個所を『君主論』から引用して解説。以後の引用は原典イタリア語とペンギン版英訳、それに参考図書で挙げている翻訳書の3種類を用いて熟読してゆく。また、著名な「目的のためには手段を選ばず」の信憑性を『君主論』のなかで確認する。さらにマキアヴェッリが理想とした「市民型の君主制」について歴史的観点から考えてみる。最後に、古典古代（異教の世界）崇拝者だったマキアヴェッリにとって宗教とは何であったかを問うとともに、マキアヴェッリとは正反対の立ち位置で社会を見つめたジョヴァンニ・ボテロにも言及できれば、と願っている。

第 84 回：12 月 1 日（火）

分野：思想・文学分野

講演：「仏教の核心に「靈性の自覚」を出した「鈴木大拙」の思索。その世界性。

講師：佐々木 閑 花園大学文学部教授

講演概要：鈴木大拙の仏教理解は、華嚴経などの大乘經典の世界観に、独自の「靈性」という概念を導入することで成り立っている。この大拙の主張は、禅や浄土思想など多数の仏教を包括する汎用性を持っているため、さまざまな領域の人たちから承認され愛好されている。ただしそれは、「諸法無我」を説く釈迦の教えとだけは融和しない。靈性というある種の神秘的実在を想定する大拙の考えと、一切の不変実体を想定しない釈迦の思想とを比較した時、大拙の考えの特性と、その限界が見えてくる。今回は、釈迦の仏教を比較の物差しとすることで、大拙の主張の意味とその特性について語ります。

「『独立自尊の志』養成プログラム『IIAS塾ジュニアセミナー』」

(1) 2020年夏季ジュニアセミナー

新型コロナウイルス感染症予防の観点から、開催を自粛して 2021 年春に延期した。

(2) 2021 年春季ジュニアセミナー（第 9 回）

新型コロナ禍を考慮して、2021 年 3 月 24 日（水）、25 日（木）の 2 日間、初めてのオンライン開催（Zoom ウェビナー）を実施した。主会場である国際高等研究所からは 9 名の大学院生による TA（ティーチングアシスタント）と 7 名の関係者が参加し、受講生 34 名は各々自宅から参加した。

受講生の地域別内訳は、京都府域 6 校 14 名、大阪府域 3 校 5 名、奈良県域 4 校 7 名、東京都域 1 校 2 名であり、今回初めて 4 大学から大学生 6 名の参加があった。大学生の参加により、より議論の内容が深まったと考えている。

今回のセミナーでは事前学習を求める反復学習法を採用した。具体的には、事前に「思想・文学」「政治・経済」「科学・技術」の 3 分野について、メインテキスト（冊子印刷分）を配布するとともに講義動画を WEB 上で配信して、オンデマンドな事前学習を求めた。セミナー当日は、受講生はオンライン上で 4 つのグループに分かれ、TA のサポートを受けつつグループ討議を行った。これまでの対面での実施と同様、グループ討議を通じて、多様な考え方をする他者の意見を受け入れ、自分の考えをまとめる経験を通じて、新たな視点や幅広い視野を獲得する有意義な議論の場が設けられた。（別紙 1：新聞記事参照）

<企画内容>

1) 思想・文学分野

講義：松尾芭蕉の世界を探究する。―古池に蛙は飛びこんだか 松尾芭蕉の名句の真相（句作体験学習を含む）

講師：長谷川 耀 俳人、朝日俳壇選者、神奈川近代文学館副館長

2) 政治・経済分野

講義：民主主義の現代的意義を考える。―公共政策規範としての「将来世代に対する責任」

講師：足立幸男 京都大学名誉教授

3) 科学・技術分野

講義：原子力開発の過去・現在を考える。―日本の「原子力開発」を推進した人々の構想力

講師：山崎正勝 東京工業大学名誉教授

(3) けいはんな文化学術教育懇談会

IIAS塾「ジュニアセミナー」のこれまでの開催経過等を振り返りながら、「独立自尊の志」を有する「全人」の輩出を願いつつ、関西の若者の教育力の涵養、あるいは日本の未来を担う人物の輩出の在り方などについて意見交換するために、「けいはんな文化学術教育懇談会」を9月15日（火）にキャンパスプラザ京都にて開催した。

本懇談会は、「ゲーテの会」及びIIAS塾「ジュニアセミナー」の開催関係者の呼びかけ

の下に開催されたものである。出席者は、ジュニアセミナー講師陣、受講生を推薦した実績のある高等学校長、けいはんなに立地する機関の代表者、大学院生（TA）、過年度の受講生、等13名であった。

本年度は、コロナ禍の影響を強く意識した下での開催となり、「IIAS 塾ジュニアセミナー」のこれまでの開催実績を踏まえつつ、コロナ禍により学習教育環境が大きく変化する中でその新たな展開方向を探るとともに、如何にして教育の本来機能を維持発展させていくかが議論の中心となりました。出席者は、以下の13名である。

2020年度「けいはんな文化学術教育懇談会」出席者（五十音順）

加藤有一	国際高等研究所専務理事
鎌田東二	京都大学名誉教授
工藤 剛	高槻高等学校校長
先崎彰容	日本大学危機管理学部教授
高橋義人	平安女学院大学客員教授
	京都大学名誉教授
高見茂	国際高等研究所副所長
	光華女子大学学長
筒井和幸	大阪教育大学附属高等学校副校長
松本紘	国際高等研究所所長
真鍋公希	国際高等研究所特任研究員、
由里詩奈	プリンストン大学在学（2016年夏季受講生）
宮島勇二	南陽高等学校校長
中西博昭	国際高等研究所事業部部長
三宅諭	国際高等研究所コーディネーター

（4）ジュニアセミナーメインテキストの出版（別紙2、3参照）

本書籍は、「IIAS 塾ジュニアセミナー」（2016年から2018年までの開催6回分）のメインテキストをベースに編集したもので、次の3巻から構成した。

- ① 佐伯啓思編著「高校生のための人物に学ぶ『日本の思想史』」
- ② 猪木武徳編著「高校生のための人物に学ぶ『日本の政治経済史』」
- ③ 池内 了編著「高校生のための人物に学ぶ『日本の科学史』」

本書籍で取り上げた人物は、高等研が開催している『満月夜開くけいはんな哲学カフェ「ゲーテの会」』における講演テーマ人物（思想家、作家、政治家、科学者等）の中、高校生向けの「IIAS 塾ジュニアセミナー」に相応しいのものとして選んだもので、日本の近代を彩った人々である。書籍名に「高校生のための・・・」と銘打たれていますが、広く一般の方々対象に、特に、大人の学び直しにも好適であるとの趣旨で刊行を企画したものである。

出版社はミネルヴァ書房(京都市)。2020年12月25日に発行。定価は2,400円＋税。

国際高等研究所(木津川市)は、2021年春季ジュニアセミナーをオンラインで開催した。京都や滋賀などの高校生や大学生の34人が参加。WEB句会やグループ討議に取り組み、文学から科学技術まで幅広い分野で見識を深めた。

京都や滋賀などの高校生らとオンラインで開催されたジュニアセミナー(木津川市・国際高等研究所)



国際高等研がセミナー

学生、思考力・感性磨く

句会や民主主義、原子力

若者の思考力を育てる目的で、16年から春と夏に同研究所で2泊3日の合宿型で開いてきた。新型コロナウイルスの影響により昨年は行えず、今回は3月24、25日にオンラインで開催。言語や民主主義、原子力をテーマに参加者は事前に専門家の講義動画を見てから臨んだ。

WEB句会では全員があらかじめ3句ずつ投句し、その中から34人がそれぞれ気に入った5句を読み上げた。「きいちごや熟れる想いの行き先は」「強くあれと顔出すつくし春来たり」といった感性豊かな作品がそろった。講師を務めた俳人の長谷川権さんが自身が選句した特選、入選、佳作を発表し、句に込めた思いや情景を作者に聞いた。

さらに、長谷川さんは高校生らの質問に答える中で、言葉や文学の可能性を説明。「ものを名付けるという行為は人間だけ。意思疎通に言葉は欠かせない」「短歌はかなさを詠むが、俳句はつらくてもクスクスと笑える明るさが大事」などと語った。

民主主義や原子力のテーマでは、参加者が4グループに分かれ、大学院生のリードで意見を交わした。

(松本邦子)

日本を代表する碩学が語る

——歴史に名を刻んだ人物たちは苦難や葛藤をどう乗り越えたのか

シリーズ・ 16歳からの 教養講座



公益財団法人国際高等研究所／高橋義人 監修 *全3巻/四六判美装カバー/各巻本体2400円

① 高校生のための人物に学ぶ日本の思想史

佐伯啓思 編著

ISBN978-4-623-09034-1 232頁

はしがき

- 第1章 西洋の模倣を脱し、主体の確立を——夏目漱石に学ぶ……………佐伯啓思
 - 第2章 日本の個人主義——森鷗外に学ぶ……………高橋義人
 - 第3章 「本当の幸い」を問うこと——宮沢賢治に学ぶ……………田島正樹
 - 第4章 日本と世界を救う自然哲学——三浦梅園に学ぶ……………小川晴久
 - 第5章 「無」と日本思想の連関——西田幾多郎に学ぶ……………佐伯啓思
 - 第6章 友情と革命的暴力——太宰治と夏目漱石に学ぶ……………田島正樹
- 人名・事項索引

② 高校生のための人物に学ぶ日本の政治経済史

猪木武徳 編著

ISBN978-4-623-08968-0 208頁

はしがき

- 第1章 智徳における「公」と「私」——福沢諭吉に学ぶ……………猪木武徳
 - 第2章 「憲法政治」への道——伊藤博文に学ぶ……………瀧井一博
 - 第3章 公共性のある社会秩序の形成——原敬に学ぶ……………伊藤之雄
 - 第4章 アジア主義的平等主義の模索——北一輝に学ぶ……………筒井清忠
 - 第5章 現実に立ち向かう理論と実践知——石橋湛山に学ぶ……………猪木武徳
 - 第6章 「近代」を超える拠を探る——西郷隆盛に学ぶ……………先崎彰容
- 人名・事項索引

③ 高校生のための人物に学ぶ日本の科学史

池内 了 編著

ISBN978-4-623-08746-4 240頁

はしがき

- 第1章 科学者の先見性とは？——寺田寅彦に学ぶ……………池内 了
 - 第2章 科学の輝きは社会のなかで——湯川秀樹に学ぶ……………佐藤文隆
 - 第3章 マンダラ的世界観の形成——南方熊楠に学ぶ……………松居竜五
 - 第4章 日本のものづくりの源流——田中久重に学ぶ……………鈴木一義
 - 第5章 日本のナチュラリヒストリー——小野蘭山に学ぶ……………岩槻邦男
 - 第6章 「型やぶり」の数学 中国伝統数学を越えて——関孝和に学ぶ……………上野健爾
- 人名・事項索引



ミネルヴァ書房

〒607-8494 京都市山科区日ノ岡堤谷町1番地 営業部直通 TEL 075-581-0296 FAX 075-581-0589
Mail eigyo@minervashobo.co.jp http://www.minervashobo.co.jp/ 宅配可(手数料@800円+税)/価格税別

別紙3 出版書籍の外観

